三省堂蒲田印刷工場

古都 祐樹・鍋谷 孝

「辞書は三省堂」「辞書はコンサイス」「辞書は大辞林」。「英語のニュークラウン」。

三省堂の辞書や教科書を英語や国語の授業や勉強で、お世話になった人は、少なくないでしょう。

大正昭和初期の蒲田地区には、三省堂の印刷工場がありました。まずは、蒲田に工場を建設するまでの三省堂の歴史を振り返ってみましょう。

一．三省堂の歴史（蒲田工場以前）

一八八一年（明治一四）亀井忠一、万喜子夫妻が、神田神保町（現三省堂書店の一角）で古書店として創業しました。

三省堂の社名の由来は、中国の古典『論語』の「学而篇」の一節「吾日三省吾身」（われ日にわが身を三省す）という言葉から採られたもので、「不忠、不信、不習について、日に幾度となくわが身を省みる」という意味です。『論語』の「三省」は「さんせい」と読みますが社名は一八八九（明治二二）年までは「SANSHODO」と表記していました。一八九〇（明治二三）年以降は「SANSEIDO」と表記しています。（株式会社三省堂ホームページより抜粋）

そして、亀井忠一は、創業からまもなく出版活動も始めます。一九〇八年（明治四一）年に日本で初めての『日本百科大辞典』を刊行開始。亀井忠一は、出版・印刷・販売の一貫した体制を目指していきます。

一九一五年（大正四）には、出版と印刷部門が株式会社三省堂として独立しました。書籍流通の三省堂書店と出版印刷の三省堂となったのです。（三省堂書店と辞書の三省堂が現在、別の会社組織としてそれぞれの道で事業展開をしていることを知る人も、多くはないかもしれません。）

三省堂は、一九二一（大正一〇）年に国産インディア紙（辞書用の薄い紙）を開発。一九二二（大正一一）年にその後の小型英和辞典の原型となる『袖珍コンサイス英和辞典』を刊行しました。

そして、同年、東京蒲田に工場用地を入手しました。現在の大田区仲六郷一丁目一〇番になります。（現ＪＲ東日本イーストハイム仲六郷）当時住所は、荏原郡六郷村大字八幡塚字浮面耕地でした。

二　蒲田工場の立地とものづくりの精神

三省堂の印刷工場の立地に蒲田を選んだ理由としては、三省堂一〇〇年史の中で、今井直一の記述を紹介します。

「省線の沿線としてこの辺りが、一番海から遠いので、汐風の影響を受けないこと、また、省線蒲田駅から歩いて、約一二、三分の距離にあり、京浜国道に近いが、わずか離れているので砂ぼこりの害を受けないこと。その他将来省線蒲田駅が貨物駅となり、」

鉄道・道路・駅の「インフラ」と貨物駅の「流通」と「ものづくりの環境」と三つの条件がそろったのが、蒲田新興産業の立地と特性ともいえるでしょう。

そして、さらに三省堂蒲田工場には、創業者亀井忠一、専務亀井寅雄の二人のこだわり、夢が込められていました。

創業者亀井忠一は、創業当時から、将来は、出版、印刷、販売の一貫体制へのこだわりがありました。また、世界に負けない印刷製本技術の習得、本づくりへの強い挑戦もあったのです。その志は、亀井寅雄にも引き継がれていきます。寅雄の言葉を紹介します。「書物というものを分けると内容と外観になると思います。内容は、もっぱら筆者の責任の範囲に属すると思われるものであり、外観とは、本屋の責任の範囲に属する印刷、製本などを申します。（中略）外国の文字の印刷のような美麗な印刷をするということは、営利のみを目的とする印刷会社では殆ど不可能なこと思われます。しかも印刷が文化に貢献する所の大部分というものは文字の印刷によって占められているものであります。（中略）率先して活字印刷の改良をしてくのでなかったら、何時の世に日本は外国の製品に優るモノを作り出すことができるでありましょう。」

（昭和一五年　創業六〇周年の式辞口演の一部より抜粋、筆者による口語訳）

この亀井寅雄の言葉は、大倉陶園の創業者大倉孫兵衛の手記と重なります。「良きが上に良きものを作って、英国のボーンチャイナ、フランスのセーブル、イタリアのジノリー以上の物を作り出したい。利益を思っては、このことはできない、（中略）」（大正七年　手記を一部抜粋、筆者による口語訳）

当時の蒲田地区には、利益を度外視しても、世界水準の製品を作りたいものづくり精神があったのでした。

三　蒲田工場の環境構想

そして、三省堂蒲田工場を建設するにあたって特筆すべきことがあります。ものづくりの環境整備です。

蒲田工場の構想の際に、当時専務であった亀井寅雄は、

アメリカ外遊の時に、ニューヨークの郊外にある印刷工場を見学して大きな影響を受けました。

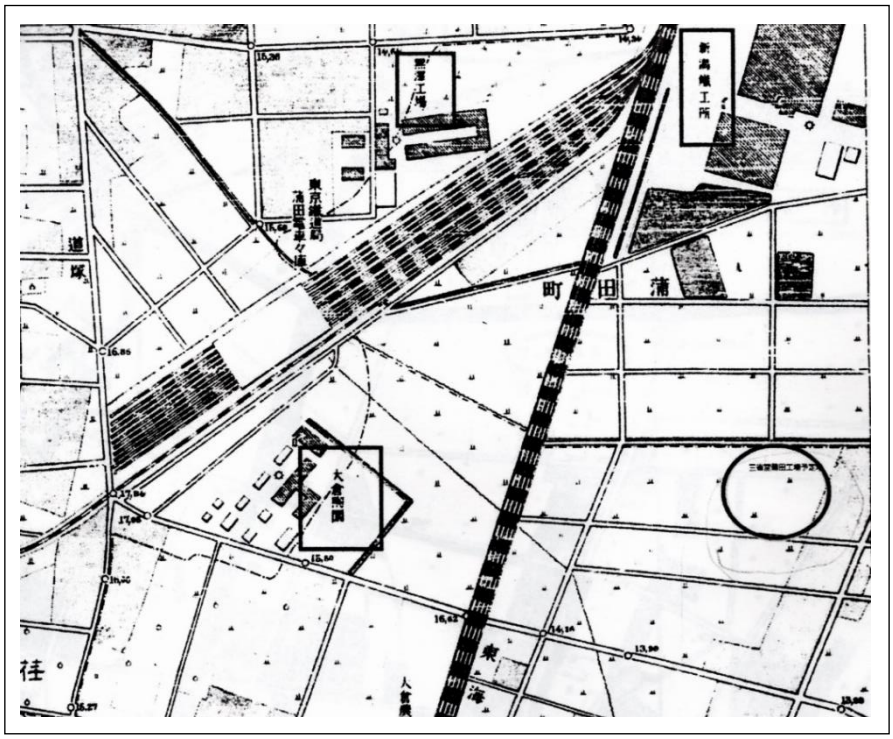
「大正十年当時専務であった亀井寅雄は、外遊の際ニューヨークで多くの印刷工場を推察したが、その中でロングアイランドのガーデンシティにあるダブルデー・ページという会社が特に印象が深い。これはすばらしく立派な自家工場を持つ出版社で、田園都市に工場があるとは不思議に思うが、実際に工場とは思えない工場なのである。従業員はバラのアーチのつづく小道を通り、美しい噴水と、イタリアから移植したサイプレスの並木の中の白亜の工場に通う。広い構内には従業員の社宅が点在し、運動場もあれば小学校もある。」（前述　三省堂の百年）

一般的な工場とは違った構想を持った亀井寅雄にとって、都心から近い蒲田の地に満足したそうです。

また、この地に工場用地を入手したときには、西に約四〇〇メートル、省線（現ＪＲ京浜東北線）の西側には、黒澤商店蒲田工場、大倉陶園が創業していました。黒澤商店蒲田工場は、工場、社宅、農園（のちには小学校、幼稚園）のある、当時の日本でも稀な工場村でした。

また、大倉陶園も、チューリップが咲く庭に、麻布から移築した洋館とモダンなものでした。

このように、蒲田駅の南側の地区には、働く人の環境を考えた当時最先端の工場があったのです。



大正一二年の蒲田町あたりの地図。
新潟鉄工所、黒澤工場、大倉陶園、電車庫は、できている。
右下には、三省堂工場予定地も記載されている。
周辺には、田畑があり、当時は、田園風景の中にあった。

四．蒲田工場の概要

工場を建てるにあたり盛土は、六郷川（多摩川）の河川改修工事の捨土を利用しました。工場の構想は、前述の今井直一氏の手記によると「（中略）「コ」の字型工場の中央部に主として印刷を、左右両翼に製版・製本・倉庫・発送部などを配し、いわゆる流れ作業を考えて設計した」（三省堂の百年史より）、印刷、製本の一貫体制を目指した総合工場でした。

設備も、「外国の製品に優るものづくり」を目ざすためにアメリカから新式高性能の印刷機を購入、また活字の規格を統一と母型彫刻機の設置ともに三省堂の組版を優秀なものとしました。（製本工場は、印刷工場のあとに完成）

構内には、食堂、売店、ピンポン室、運動場、ラジオ、蓄音機なども設備されていました。

女子工員は、当時女学校の制服だった紺のはかまを着用して通学していました。また、図書館もあり、生け花や茶の湯などのクラブ活動も盛んでした。蒲田工場は、別称「蒲田女学校」と呼ばれていました。

五．戦後の移転へ

蒲田工場操業開始から、写真製版、母型彫刻研究、新型印刷機械導入と技術の改良をしてきた三省堂は、一九三五（昭和一〇）年後は、インディア紙の活版印刷では国内トップの実績となりました。しかし、一九四五年（昭和二〇）太平洋戦争の大空襲で蒲田工場は、焼失します。その後三崎町の仮工場で創業することになります。

終戦後、一九四七年（昭和二三）、独禁法により、出版と印刷を分離、三省堂出版株式会社を設立。同年、蒲田工場敷地は売却され、翌一九四九年（昭和二四）三鷹市に新工場が設立されます。その後、一九七六年（昭和五一）三鷹市から八王子市に移転。一九八一年（昭和五六）には、

株式会社三省堂から分離独立して、三省堂印刷株式会社として設立され現在に至っています。

三省堂蒲田工場は、戦後、国鉄の社宅になり、現在は、JR 東日本イーストハイム仲六郷の建物に建て替えられている。

参考文献
三省堂の百年史
大田区史下巻